茹志鵑「百合花」をめぐって

小塩恵美子

一

文化大革命の終結後、茹志鵑は「剪輯錯了的故事」、「草原上的小路」[1]等、以前とは傾向の異なる作品を発表しはじめるとともに、一九五〇年代六〇年代当時の彼女が置かれていた状況についても、少しずつ語りはじめた。

「我対創作的一点看法」[2]では、「剪輯錯了的故事」を書く動機のひとつとして、一九五八年九月発表のルポルタージュ「衛星従東方昇起」[3]をあげている。これは視察団の一員として安徽省樅陽県の高豊農業社の「衛星田」を訪れた際に書かれたもので、大躍進の奇跡的増収に対する感動が、情熱的な筆調で表わされている。「我対創作的一点看法」では、五八年当時の感動と熱狂、しばらくして奇跡的な増収が他の田にあった稲まで移しかえて作られたものだったことを聞いた時の困惑を通して、大躍進とそれを記事にしてきた自己の立場への疑問が語られる。

また小説「実習生」に附された「後記」[4]からは、五六、七年頃書かれたこの作品を当時発表しなかった裏に、作品の思想性について自己内部で抑制が働いた様子がうかがえる。

一九五八年三月に発表された彼女の代表作である「百合花」[5]についても、「我写『百合花』的経過」[6]「説遅了的話」[7]等により、執筆当時の状況が明らかにされた。この創作の経緯については次節で検討するが、以上はともに自己をとりま

く現実の中で揺れ動く茹志鵑の姿を映しており、当時の作品から推し測ることのできなかった一面をのぞかせている。文化大革命を経て二十年以上前を回顧する時に伴う彼女自身の思い入れも考慮する必要があるとはいえ、こうした文章を手がかりに、五、六〇年代の茹志鵑をとらえ直してみることは、そのころの作品にみられる新中国への賛美が全く屈託のないものだったかどうかという点も含めて、茹志鵑の評価にふくらみをもたせることにつながるだろう。

とりわけ「百合花」は茹志鵑の名を全国的に知らしめ、作家としての本格的活動を可能にする契機となっただけでなく、執筆、発表当時の状況を通して、創作に対する彼女自身の態度、方法を決定する意味でもひとつの節目となった。ここでは「百合花」執筆前後の茹志鵑を追いつつ、この作品が彼女の中で果たした役割について考えていくことにしたい。

二

「百合花」は一地方雑誌である『延河』から『人民文学』に転載され、加えて茅盾の賞賛を受けたことで一躍注目を浴びた。茅盾は「百合花」転載と同じ『人民文学』一九五八年六期の「談最近的短篇小説」で「百合花」の構成、描写を中心に批評を加えてこういう。

これは私が最近読んだ数十篇の短篇のうち最も満足し、また最も感動した一篇である。それは構成が綿密で、無駄な筆のない短篇小説でありながら、同時に抒情詩の風あいにも富んでいる。

そしてこれを契機に「ひとりが倒れても千万人が立ち上る楽観精神を示すだけでなく、同時に平凡な普通の人の心の中から、比類なき輝かしい魂を掘りおこした」[8]という魏金枝の言葉に代表されるような高い評価を受けるに至る。

「百合花」の創作経過について文化大革命前には特に書かれることはなかったが、一九八〇年になって「我写『百合

花』的経過」が発表された。ここには作中の通信兵のモデルとなった人々、前線の救護所での体験、それらをもとに作品を練り上げていった経緯が語られ、と同時に当時彼女の置かれていた状況――夫、王嘯平が反右派闘争で批判されていた――にも触れている。

私が「百合花」を書いた時は、ちょうど反右派闘争が非常に激しく行なわれていた時期で、社会的にもそうだったし、家庭的にもそうだった。嘯平はとても危険な状況にあったが、私は彼を救う術がなく、ただ毎晩子供が眠るのを待って、悲しい気持で戦争中の生活や当時の同志の関係を思いおこした。脳裏には映画のように、戦争中に会った様々な人々があらわれた。戦争は人に長く話せるだけの機会を与えないが、かえって人を深く交わらせる。時にはたった数十分、数分、ただ一瞥しただけで去ってしまう短い時間でさえあるが、人と人との間はこの一瞬で心を通じ合い、生死を共にするに充分なのだ。

「百合花」はこのように、とぎれることのない憂慮の中で、はるかに当時に思いを馳せた時得た産物だ。しかし作品と私の憂慮は直接関係はない。(9)

王嘯平は現在、上海芸術劇院に所属する演出家である。シンガポールで生れ育ったが、一九四〇年帰国し、新四軍に参加、新四軍では文工団に在籍した。四五年入党。茹志鵑とは五〇年に結婚している。五八年当時は南京軍区政治部前線話劇団の副団長だった。『中国芸術家辞典第四分冊』(湖南人民出版社、一九八四年)によれば、五八年に江蘇省電影制片廠に配置がえになり、ニュース映画関係にいたが、六二年に上海芸術劇院に移っている。六二年に右派のレッテルをはずされたものの、正式に「平反」されたのは七九年になってからである。「我写『百合花』的経過」が八〇年に書かれたのも、この間の事情を反映しているのだろう。「作品と私の憂慮は直接関係はない」と言ってはいるが、以下みていくように、彼女の執筆の過程においてはやはり大きな影響があったと思われる。

反右派闘争における王嘯平に対する批判はどんな理由によるのか。当時の新聞雑誌から知るのは難しいし、王嘯平自身にも、直接それについて語った文章はみられない。茹志鵑が語ったところによると、[10]当時王嘯平の文芸工作の方針に関する意見は主に、「国家がすべての文芸工作に責任を負って管理するやり方は、あまり適当でない。いくつかの劇団や文工団には自主的に責任を持たせて演目その他をきめさせるべきだ」と「部隊での文芸工作のスローガンが『兵士に奉仕せよ』であるのはあまりに狭すぎる。部隊の文芸工作者も『労農兵に奉仕する』べきだ」の二点だったという。王嘯平は批判の後、軍籍党籍ともに剝奪される。

茹志鵑は五八年三月初め、四歳になる娘の王安憶をつれて南京の夫に会いに行った。南京から帰った彼女は、上海作家協会党組の指導者に夫の問題を報告し（内容は不明）、自分自身はしっかりと工作しなければならないと意志表示した。

一九五八年三月にはまた私はちょうど幼い娘を連れて南京へ、夫のもとへ行った。軍を除籍され、党を除籍され、右派の帽子をかぶされるというこの狂った嵐の中で傍らに家族がいてあげられるように。あの時、人は皆水中に落ち、どこに流されていくのかわからない状態で、つまらないひとつの作品などにかまっていられなかった。「百合花」は大きな厄災に伴って私の生活の道にやってきた。……南京から帰って、私は当時の上海作協党組指導部に夫の問題をありのまま報告し……私はすぐわかった。これから私の身分は右派の家族なのだ。生活、創作、みな自信喪失の深淵に直面した。「どうしよう、どうしたらいいのか？」私は親しい人達に救いを求めたが、得られたのも無言の同情だけだった。[11]

このような状況のなかで「百合花」は書かれた。そして王嘯平批判は、茹志鵑にとって最も身近にいる家族が批判されたというだけでなく、新四軍時代以来の同志に向けられた批判でもあった。そのことの意味は大きい。とすれば、この作品が彼女にとって、単なる解放戦争期に出会った人々への賛歌という意味しか持たなかったのか、疑問である。そ

れを考えるにはまず彼女の新四軍に対する思いを見なければならない。

三

「百合花」は解放戦争時期の人と人との関係、絆の強さを描き出す。早くに父母と別れ、十八歳で入隊してから新四軍を「家」とみなしてきた茹志鵑には、戦争中の人と人との関係に対する絶対的な信頼がある。

茹志鵑が三歳の時母親は死亡、父親は家を出た。家はもとは裕福だったようだが没落し、兄妹は親戚に預けられるなどしてばらばらになった。茹志鵑はすぐ上の兄とともに祖母に育てられた。それからは上海と杭州を行ったり来たりの貧窮した生活が続いた。少女時代の生活のあらましは、事実とのいくらかの違いはあるにせよ、自伝的小説「她從那条路上来」[12]が伝えている。祖母が亡くなり、上海のキリスト教系の孤児院に半年入った後、いくつかの学校で半年、一年と学び、浙江省武康県の中学で卒業証書を手にする。

このころ書いた「生活」[13]という作品には、やっとの思いで手に入れた大学の卒業証書を手に就職試験に臨むが、容姿しか問題にされない現実にぶつかって卒業証書を破りすてる少女が描かれている。茹志鵑はこの作品についてこう述べる。

「生活」の女子大生はもちろん私ではなく、私は小さな初級中学の卒業生にすぎない。だが仕事を捜すという問題では、大学生の身の上が私より有利だとは思えなかった。……当時の私は何も持っておらず、持っていたのは腹の中の憤慨、当時の世界、社会に対する憤慨だけだった。……これを書いた時暮らしは辛かった。食べる物はあったが、他人の家の食卓に座り、住むところもあったが、他人の家の部屋に居た。……雨やどりのあずまやは雨風をしのぐことはできるが、家ではない。[14]

一九四三年の冬、茹志鵑は新四軍に入隊する。今まで貧しさに追われ、兄妹もばらばらで、一ヶ所に長くいることもなかった茹志鵑にとって、新四軍での生活は「家」と呼べるような暖かさを持っていた。肉体的には過酷だが、仲間の団結と信頼の中で、彼女の心は落ち着く場所を得た。

この時の環境は、三年半前上海で「生活」を書いた頃に比べて、何百倍も不安定で、何百倍も苦しかった。だがおかしなことに、心は素直で、安定していて、毎夜行軍し、日々営地をかえても漂泊感はなくなっていた。……雨をよけるあずまやさえなかったが、ここは家であった。(15)

軍隊生活を語る時、茹志鵑の文章は人々に対する無条件の信頼と懐しさに満ちている。また行軍の合間を縫ってノートに詩や散文を綴るようになるのもこの時期である。これ以前、「生活」が『申報』に掲載されてはいるが、本格的な文学的出発もこの時期とみてよいだろう。

茹志鵑が自己の文学に接する転機としてあげる事柄がふたつある。ひとつは祖母の亡くなる少し前、杭州で隣人から『紅楼夢』を借りて読んだ時で、今まで文学作品にほとんど接することのなかった彼女は、その「全文を暗記するほど」熱中した。文学に対するめざめであった。もうひとつは、一九四七年に彼女の所属する文工団が「白毛女」を演じた時のことである。当時の模様は呉強「新四軍文芸活動回憶」(16)の以下の記述によっても知ることができる。

当時、私は第二十四軍で工作していた。第二十四軍文工団が萊蕪戦役の勝利の後、新しく解放軍に加わった戦士のために「白毛女」を演じた時、戦士達は喜児が縛られ連れ去られるのを見るとつぎつぎに立ち上り、「悪らつなボス地主を打倒せよ」のスローガンを高く叫び、土くれや石を拾いあげて舞台の黄世仁、穆仁智に投げつけた。

茹志鵑にとっても、これは「今でも冷静に描くのは難しい」(17)ほど強く感動した出来事だった。

ある戦士はこらえきれずに立ち上り、数語のスローガンともつかない言葉を叫ぶとまた黙って腰をおろした。あ

る戦士は芝居なのも忘れて舞台の黄世仁にとびかかった。ある戦士は慟哭し、その場に倒れた……(ママ)彼らは何を見たのか？　彼らは舞台の上に自分の父を見、姉妹を見、自分の過去の悲惨な境遇を見たのだろう。[18]

芝居が終り、兵士達は「喜児の仇を打とう」と叫びながら前線に出発する。舞台で演じる者と兵士達の心が解放という目的にむかってひとつになる。それまでも「白毛女」を演じてきたのではあったが、この日の舞台は茹志鵑の心に文芸が人に訴える力の強さを刻みつけたのである。

そのような兵士達との一体感ばかりでなく、毎日生活をともにする文工団の人々に、彼女は人と人との信頼関係を見出していく。

彼女にとって軍隊生活は信頼できる人間関係を基盤に持つ新しい生活の発見であった。「魯南突囲的追記」[19]には、解放に向かって進む人々の力強い姿や苦難の中での団結が情熱的な文章で綴られている。そこに描かれるのは特別秀でた人間ではないが、それぞれに輝きを放つ人々である。最も苦しい時期に、生死をともにし、思想をともにして戦ってきた人々への信頼は絶対的である。茹志鵑は新四軍時代にそうした強い絆を身をもって体験してきた。それらはひとつひとつ具体的な場面を伴って思い出されるものであり、強烈な印象となって心の中に刻まれていった。彼女の人と人との関係に対する信頼は、この時期に形成されたといっていい。そして「百合花」の通信兵もまた、それらの人々によって形づくられている。

「百合花」を書いた頃、茹志鵑は毎夜軍隊時代に出会った人々に思いを馳せた。夫が批判されて不安な日々に、人々も自分も中国の解放に向けて輝いていた時期が思い出されるのも当然だろう。そして同じく文工団に所属していた王嘯平は、茹志鵑にとって夫である以上に同志であり、絶対的な信頼をもっていた人物のひとりであった。王嘯平への批判は、生死をともにしてきた新四軍の時代、彼女が最も信頼してきた人間関係に、突然「右派」という罪名を割りこませ

た。茹志鵑にとってそれは軍隊時代から確固たる信頼を持ちつづけていた人間が人民と離反しているとする批判としてやってきたのである。

この時期に「百合花」を書いたのは、自己も含めた人々が最も輝いていた時代を懐古すると同時に、その時代の人々の強い絆を自己の内部で再確認するためではなかったろうか。「百合花」執筆時の社会主義建設の時代も、軍隊時代から続く強い絆の延長線上に存在するのであり、夫も自分もその構成員であるはずだった。茹志鵑は軍隊時代に出会った人々とその絆の強さを再確認することで自らを支えようとしたのではないか。だからこそ、「百合花」は、人と人との関係が結晶といえるほど純粋化され、抒情性に富むものとなったのであり、茅盾の絶賛を受けるような完成度の高い作品になり得たのだろう。

四

「説遅了的話」には、第二節でみたように、「百合花」執筆の頃「生活、創作、みな自信喪失の深淵に直面した」[20]とある。創作に関する自信喪失とは何を指すのだろうか。以下ではそれについて考えてみたい。「百合花」が茹志鵑の内部に占める位置を、別の面から映し出していると思えるからである。

「百合花」は『延河』の五八年三期に掲載されたが、『延河』の前にも二度ほど他の雑誌に投稿し採用されなかった[21]。「我写『百合花』的経過」では当時を振り返って、「百合花」は「愛情ぬきの愛情牧歌」だったから当時の編集部が採用しなかったのも無理はないと言っているが、当時は、編集部と考え方の上で距離があることに気付き、自信を失いかけていた。

……しかし送っても返却され、また送っても返却された。彼らの意見はこの作品の感じが暗いので、発表できな

いというのだった。こうなると、作品は改める余地すらなくなってしまった。私は「百合花」のために心を痛めたが、同時に自分の文芸に対する見方とそれらの編集部の考え方との間に距離があるのにも気付いた。これは私をとても悩ませ、自分が創作できるかどうかにさえ迷い疑いを持った。[22]

「百合花」に私は若い情熱を注いだが、原稿が書き上り、郵送するとすぐ返却されてきて、作品の調子が比較的沈んでいて、人々の前進を鼓舞することができないといってきた。私はそれでもこの作品をまた送ったのだが、作品が「沈んでいる」ことについて、だんだんと自分でもそう思うようになってきて、人々の前進を鼓舞するような「昂揚法」を模索しはじめた。一九五八年三月、作品はついに陝西の『延河』月刊に発表された。私は掲載されたことには感激したが、あまり嬉しくはなかった。この作品の境遇をみて、これが、みにくいアヒルの子で、私が過去に書いたもののように……誰も知らないところへ落ちていくのだと思いこんでしまった。[23]

「我写『百合花』的経過」では、一九五八年初め、文学における多くの規制は、いくらかもう世間に「降りてきて」いたが、まだ彼女を縛るものになってはいなかったと言っている。まだ業余作家であった[24]彼女は、創作・発表に際して、それまで特に外部からの規制を感じたことはなかったのだろう。「百合花」を発表する段階になって初めて、編集部との意見の食い違いという形で、題材、方法等創作面においての作家に対する要請とのずれを感じたのである。また、「百合花」が軍隊時代の強い絆の再確認という欲求に根ざした作品であり、強い愛着のあるものであったとすれば、編集部の意見との「ずれ」は、茹志鵑にとっては、王嘯平批判と同様に、しかも今度は彼女自身の創作態度に直接かかわる形で、軍隊時代の絆に対する信頼のあり方に疑問を投げかけるという性格をもって迫ってくることになる。先にあげた引用にみられるような茹志鵑の動揺は、作家への要請と自己の創作との不一致に直面した時、自己の疑問を自

信を持って提起できない、かえって、疑問を抱くこと自体に戸惑い、疑いの目を自分自身にむけていく、そのようなところに生まれるように思う。

茅盾の批評「談最近的短篇小説」は、茹志鵑に立ち直りのきっかけを与えるものとなった。賞賛を寄せたことだけでなく、その分析の内容によってである。

「談最近的短篇小説」における「百合花」評は次のように要約できる。

一、構成が緻密で起伏（「節奏」）に富んでいる。

二、物語の展開と人物の創造がうまく結合し、進むにしたがって人物が精神世界も含めた有機的人間として印象づけられる。

三、細部の描写にも無駄がない。特に野菊や通信兵の服の肩口の破れなどを効果的に時間の経過に従って描写し、人物の性格の発展を描き出す「前後呼応」の手法にすぐれている。

そして、簡単なストーリーながら、解放軍の崇高な品性、人民の解放軍をいつくしむ真心を反映しているとして、「これは多くの作家がすでに心血を注いだ主題であり、『百合花』の作者はこのような短篇でこの長い列に加わったのだが、独特な持ち味がある。先人の言葉を借りれば、その持ち味とは清新、俊逸である」[25]と述べた。

茅盾は「百合花」の技法的な面に即して具体的に評しているのだが、茹志鵑が力を得たのはその中から導き出される「持ち味（「風格」）」としての賞賛であった。

一九五九年、ちょうど反右派闘争と反右傾の後、当時『百合花』が先生（茅盾―小塩注）の激励を得て、胆っ玉も大きくなってきた。この小説の調子が沈んでいないという以上、誰の前進も妨げないように思えたし、反対に「多くの作家がすでに心血を注いだ主題」でさえあり、そのうえ先生はこのような主題を、「よくある慷慨激昂し

た筆づかいの他に、別の風格でも描きうる」と認めた。それで、多くの、以前に述べたいと思っていたものが一斉に浮かんできた。たとえば「高高的白楊樹」「澄河辺上」などである。[26]

「百合花」は私の創作の経歴の中で鍵となる作品であり、私に多大な勇気を起こさせ、創作というこの道を歩ませた作品である。もっと的確に言えば、茅盾同志のこの作品に対するあたたかい激励によって、私は更に堅く決心し、自信を持った。[27]

茅盾の批評とそれに続く文壇の注目は、茹志鵑が「百合花」に托した心情——人と人との絆の強さの再確認——を、彼女の表現方法をも理解する形で肯定するものだった。それは王嘯平批判による不安と自己の創作への迷いを同時に抱えていた彼女に、表現方法と、王嘯平も含めた人々への信頼のあり方、そのどちらに対しても信頼回復に希望を与えた。彼女の文章から見る限り、茹志鵑は批判された夫を自分から切り離すことで「浄化」する方向へは進まなかったし、また反対に王嘯平批判に対しあらわな疑問を呈してもいない。それ以後の作品が示すように、自分が見知った人々を信頼し、その人々を描きつづける方向に留った。茅盾の賞賛を通して、茹志鵑は自己の作品の持つ特徴を、この時改めて意識した。そして自分の作品のような表現方法が可能であるという希望を見い出したのではなかったろうか。

五

「高高的白楊樹」[28]が書かれたのは翌五九年二月である。「百合花」から約一年、小説は発表されておらず、散文三篇のうち二篇は『文芸月報』の記者としての仕事だった。その後「如願」[29]（五九年四月）、「澄河辺上」[30]（五九年五月）、「春暖時節」[31]（五九年九月）、「里程」[32]（五九年九月、いずれも執筆年月）と次々に小説が執筆されるのを見ると、この一年の空白は

自らの創作の方向を定め、歩み出すために要した期間ではないかとも思えてくる。

一年の空白の後、最初に書かれたのが「高高的白楊樹」である。この作品では、同名の張愛珍というふたりの女性を通して、解放戦争時期と五九年の現在がしっかりと結ばれ、人々の持ちつづけた願いが現在の社会に根づいていると描かれる。茹志鵑はこの作品によって、「百合花」で確認した過去の人々の強い絆をより意識的に前面に押し出し、現在につながるものとして示した。ここで「高高的白楊樹」の内容を詳しく考察する余裕はないが、この中で人と人との関係が過去から現在につながるものとしてとらえられていることは、「百合花」当時の状況及びそれから一年を経て書かれた作品であることを思うとき、注意しておいてもよい事柄のように思われる。

「高高的白楊樹」は、茹志鵑も「『この作品には方向性に問題がある』と言われた」[33]と言っているように、発表当時必ずしも高い評価はうけなかったようである。安麗は「堅持百合花風格的茹志鵑」[34]で次のように言う。

「百合花」を世に問うた翌年――一九五九年に、論争が起こった。少なからぬ人が茹志鵑は小人物を偏愛し、現実の主要な矛盾を反映せず、複雑な矛盾の衝突を表現せず、共産主義の品性を有した英雄形象を造り出していないと叱責した。

こうした批判は、欧陽文彬が「高高的白楊樹」の若い張愛珍、「在果樹園裏」の小英を例にあげ、考慮すべき問題として「小人物」への偏愛、複雑な矛盾の衝突がないのを指摘した[35]中にも見られ、また六一年に行なわれた茹志鵑作品に対する論争[36]においても、それらを作家の個性とみなすか、克服すべき欠点とみなすかがひとつの争点になっている。

「百合花」執筆時に雑誌編集部と茹志鵑の間にあった「ずれ」と同様の問題が、「高高的白楊樹」以後に顕在化してくる。これは逆にいえば「百合花」執筆時に迷いを抱いた自己の創作方法を、彼女がそれ以後も捨て去らなかった、むしろ茅盾の批評等を通して、題材や表現方法における特徴を、新たに意識した上で用いるようになったことを示して

いる。

「高高的白楊樹」以後の作品においてもそうした創作方法をとりつづけたが、その姿勢が、王嘯平批判及び茹志鵑自身の創作への批判に対する彼女なりの疑問の保持という意識に根ざしていたかどうか。六一年の茹志鵑作品に関する論争や六四年の中間人物論批判での動揺、また党員としての立場を考える時、いますぐ断定はできない。ただ、これまでみてきたことからいえるのは、「百合花」から「高高的白楊樹」に至る経緯は、その後も自身が放棄しえなかった創作方法を、意識的にとらえ固執していく上での最初の分岐点だったということであり、その意味で、文化大革命前の茹志鵑の作品の方向を決定づける要因をもっていた。

一九五九年初版の短篇集『高高的白楊樹』が七八年に再版された。五九年版には十篇の短篇小説の他、散文五篇が収録されていたが、七八年版では散文は「在社会主義的軌道上」「収穫時節」のみである。「収穫時節」は五八年十一月執筆のもの、「在社会主義的軌道上」は五八年三月に上海から南京に向う急行列車について取材したもので、三月三日に列車に乗った旨記されている。三月七日には南京で夫に会っているため、夫を訪ねて南京に行った際の取材と考えられる。[37]「在社会主義的軌道上」を残した理由として「重印後記」に書かれているのは、現代化にむけて奮闘の精神を忘れないようにといったことだけだが、その点では他の散文とさほどの違いがあるとは思われない。七八年にはまだ王嘯平は「平反」されていない。五篇の散文のうちなぜこの二篇だけを、特に「在社会主義的軌道上」を残したのか。彼女にとってはこの二篇がその執筆時期によって非常に思い出深い散文としてあったのではないか。とすれば、これもまた「百合花」執筆の前後という時間が彼女に与えた影響の大きさを物語っているといえよう。

注

(1) 「剪輯錯了的故事」(『人民文学』一九七九年二期)、「草原上的小路」(『収穫』一九七九年三期)。

(2) 『語文教学通訊』一九八一年一期。『中国当代文学研究資料・茹志鵑研究専集』(浙江人民出版社、一九八二年。以下『専集』とする)所収。

(3) 『文芸月報』一九五八年九期。

(4) 『芙蓉』一九八〇年三期。

(5) 『延河』一九五八年三期。

(6) 『青春』一九八〇年十一期。『専集』所収。

(7) 『文匯報』一九八一年四月一日。

(8) 魏金枝「上海十年来短篇小説的巨大収穫」(『上海文学』一九五九年十期)。

(9) 「我写『百合花』的経過」。

(10) 細谷草子「茹志鵑『百合の花』の創作経過」(『野草』二八号)において、細谷氏が直接茹志鵑から聞いたところに拠る。引用部分は、細谷氏が茹志鵑の語った言葉として載せているものである。

(11) 「説遅了的話」。

(12) 『収穫』一九八二年四期。

(13) 『申報』一九四三年十一月二二日。『惜花人已去』(上海文芸出版社、一九八二年)所収のものに拠った。

(14) 『惜花人已去』「後記」。

(15) 同右。

(16) 『新文学史料』一九八〇年四期。

(17) 「回顧」(『上海文学』一九六二年五期)。

(18) 同右。
(19) 一九四七年九月の日記。『青春』一九八〇年一期に発表。『惜花人已去』所収。
(20) 注(11)。
(21) 「今年春天」(『解放日報』一九六二年五月一七日)。
(22) 同右。
(23) 注(11)。
(24) 「百合花」以前にも短篇集『関大媽』を出版(一九五五年)するなど、何篇かの小説をすでに発表していたが、五八年当時はまだ『文芸月報』(後の『上海文学』)の記者を本業とする業余作家だった。専業作家になるのは六〇年である。
(25) 「談最近的短篇小説」。
(26) 「二十三年這一〝横〟」(『上海文学』一九八一年五期)。
(27) 「時代的足跡——『百合花』後記」(『光明日報』一九七八年九月一七日)。
(28) 『収穫』一九五九年二期。
(29) 『文芸月報』一九五九年五期。
(30) 『人民文学』一九五九年七期。
(31) 『人民文学』一九五九年十期。
(32) 『上海文学』一九五九年十一期。
(33) 注(21)。
(34) 香港『新晩報』一九八〇年四月一日。『専集』所収。
(35) 欧陽文彬「試論茹志鵑的芸術風格」(『上海文学』一九五九年十期)。
(36) 主な論文を以下にあげておく。

侯金鏡「創作個性和芸術特色」（『文芸報』一九六一年三期）。

細言（王西彦）「有関茹志鵑作品的幾個問題」（『文芸報』一九六一年七期）。

魏金枝「也来談談茹志鵑的小説」（『文芸報』一九六一年十二期）。

潔泯「有没有区別？」（『文芸報』一九六一年十二期）。

伊新整理「関于茹志鵑創作風格的討論」（『北京日報』一九六二年一月二五日。『専集』所収）。

「作家協会上海分会挙行茹志鵑作品討論会」（『文匯報』一九六一年八月五日）（未見）。

(37) 藝舟「文壇上的母与女」（『中国婦女』一九八〇年十一期）。